

東アフリカ・ケニアの 農業ビジネス探訪

(連載全6回)

4

紅茶輸出世界一を 支えている 徹底した品質管理

ア フリカにおける主要農産物の1つが紅茶である。現在、世界の紅茶のおよそ14%がアフリカで生産されている。なかでもケニアはアフリカでトップの生産量を誇り、その輸出量はスリランカや中国を抜いて世界トップの24%に達している。

日本に輸入されている紅茶については依然としてスリランカやインド産のものが中心で、アフリカ産紅茶の輸入量は10%に満たない。そのた

め、日本では紅茶のイメージはなかなかアフリカとは結びつかない。

しかし、紅茶の伝統のあるイギリスでは、今や茶の全輸入量の62%がアフリカ産である。特にこの10年ほどの間に、そのシェアは飛躍的に伸びている。紅茶といえばアフリカなのだ。紅茶はアフリカにとって外貨収入を支える屋台骨として、今後ますます成長が期待されている農業分野なのである。

アフリカは実は紅茶生産の分野で

は比較的新参者だ。アフリカで茶の栽培が始まったのは約130年前。イギリスの教会関係者が東アフリカに持ち込んだ茶を、植民地の宗主国の企業が現地生産したのが始まりである。

インドやスリランカといった伝統的な産地を差し置いて、アフリカの紅茶産業がどうしてここまで伸びたのか。その理由を知りたくて世界トップの紅茶輸出国であるケニアの紅茶生産の現場を訪れた。



ケニア中央部マタアラの紅茶畑

作家・翻訳家

田中 真知 タナカ マチ

1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に『アフリカ旅物語』（北東部編・中南部編、凱風社）、『ある夜、ピラミッドで』（旅行人）、『孤独な鳥はやさしくうたう』（旅行人）、『美しいをさがす旅にしよう』（白水社）など。



タアラ紅茶ファクトリーの入り口。「持続可能な茶の栽培」というスローガンが書かれている



マタアラ紅茶ファクトリーのワイナイナ氏

「ケニアの紅茶の生産は徹底した品質管理にあります」とワイナイナ氏はいう。「われわれは農薬を使いません。そして、品質管理についてさまざまな国際認証を取っています。何より気をつけているのは、お茶の生産と自然環境との調和です。茶を生産することで環境が破壊され

ケニア中央部、ナイロビから100数十キロ離れたティカはケニアでも有数の紅茶の生産地である。訪れたのは、このティカの町からさらに数十キロ先のマタアラ紅茶ファクトリー。このあたりはなだらかな高地になっていて、山の斜面には一面紅茶畑が広がる。ここで生産される紅茶は、世界でも最も質の良いものの1つとされている。

迎えてくれたのはファクトリーでフィールドサービスコーディネーターを務めるワイナイナ氏。「まずはお茶でも」とこのファクトリーで生産された紅茶を出してくれた。「いちばん質のいい物ではないのですが」といわれたが、それでも香りが高く、とてもおいしい。

正直、アフリカの紅茶はインドやスリランカに比べると、質は落ちるのではと思っていた。しかし、それが偏見であることは、出された紅茶を飲み、説明を聞くうちにすぐにはつきりした。

「農業は絶対に使わないだけではなく、お茶の葉を蒸すための燃料には間伐材など特定の木だけを使う。茶摘みでは機械を使わず、新芽とその下の二枚の葉を手で丁寧摘むなど細かい取り決めがあります。紅茶の生産が環境を破壊してしまうならば、それは結局産業にとってマイナスになる。環境と共存していく方法を取ることで紅茶の品質に加えて、商品価値を高めてくれるんです」

ケニアの紅茶生産はその6割以上が小規模農家によって行なわれている。マタアラでも生産者はみな小規模農家だ。そうした小規模農家を地域の経済を担う共同体としてまとめあげているのが、このマタアラ紅茶

「これが率直にはなりません」

これは率直に言って意外だった。茶の生産や輸出が伸びている背景には、実は労働搾取や環境破壊といったネガティブな面もあるのではないかと思っていたからだ。とはいえ、ファクトリーの入り口には「Sustainable Tea Farming」(持続可能な茶の栽培)といったスローガンが掲げられ、事務所や工場には環境保護についての啓蒙ポスターが張られている。そのことに感心したことを伝えると、ワイナイナ氏は「それがケニアの紅茶の成長の秘密です」といった。

ファクトリーなのである。そこでは生産者と企業が密接に結びついて、より質の高い、しかも付加価値のある紅茶をつくるための工夫や努力がなされている。マタアラ村そのものは、アフリカの典型的な小村なのだが、そこで高い意識の品質管理が実践されていることには驚かされた。



紅茶栽培とコミュニティと環境保護の関係を説くポスター



紅茶ファクトリーの建物。中は撮影禁止